

## イマナカツギマロチヨ 『セイジケンリヨクノレキシ テキコウゾウ』

嶋崎, 譲  
九州大学法学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/1331>

---

出版情報 : 法政研究. 24 (4), pp.110-122, 1958-03-20. 九州大学法政学会  
バージョン :  
権利関係 :



## 今中次鷹著 『政治権力の歴史的構造』

嶋崎讓

一

「ここにおいて、より美しい、より壮健な人間を生産するために作りだされた氏族制度とその身分法の原始的な社会価値が全く没却されることとなった。何となれば、奴隷制度の成立以来、生産力の原則は、もっぱら生産の物質的な量を高めることのみ追求して発展し、その生産力の発展を、直接に人間の社会的存在へ向って価値づけるための社会的制約の規定が却って停滞しはじめたからである。奴隷を牛馬のごとく働かせ農民の最低生活をおびやかし、労働の最底生活をさえ保障し得ないような生産力の運営によって、ますます生産力の蓄積を高めることばかりが、社会目的として追求されるようになったからである。……」

ここに人間がその歴史過程において作りあげた科学与技術の罪悪面がひそんでいるのである。最初において真実に美わしい人間と賢明にして強壮な人間を生産するための規定であった氏族制度——男女の法が、少数のおごりと一人の野心を支えるための社会規定に变质して行ったことに、歴史の根本的な誤りがあったのである。」

これは教授が『科学与平和』と題して今年の一月三日号の『朝日新聞』によせられた評論の一節である。この一節は次のことを結論づけるための歴史的前提である。すなわち生産力の発展の要素としての科学与技術の発展は、本来、人間の幸福のための不可欠のものである。ただ人間がそれを正しく制禦し、正しく用いることをしなかったところに、それが悪や戦争と結びつく弊害が生じ

たのである。現代科学技術の発展が、国際戦争の脅威となっているのは、その源泉が決して科学技術にあるのでなしに、生産力の正しい運営を統制すべき社会機構の欠陥に内在しているのである。

教授は科学技術を平和に結びつけることを妨げているものとして、社会構造に規定された政治の問題を提出されようとしているのである。

教授の現代政治における『平和』へのヒューマニズムは、民族―階級―政治権力を要素として政治を把握されようとする教授の独特の政治原理にもとづくものである。このような政治学の原理的体系化は、すでに、学位請求論文として書かれた『政治学序説』（一九五一年）において到達されたものである。しかし『序説』において展開された政治学原理は、政治権力の原始的起源を中心として、政治権力の原理的発生論で終っていた。『政治権力の歴史的構造』は、『序説』発刊以来発表された、政治権力の構造の歴史的発展に関する研究の成果をまとめたものである。その意味で、教授は『歴史的構造』を、『序説』の続編として『統治学序説』と称せられている。

本書は、第一章「イデオロギーとしての政治」、第二

章「政治の原始的起源に関するエンゲルスの理論」、第三章「生産力は何故発展するか」、第四章「政治権力の歴史的構造を規定するもの」、第五章「政治権力の原始的起源」、第六章「古代権力とアジア的デスポチズム」、第七章「古代政治権力の崩壊（封建制の成立）」、第八章「封建制政治権力の構造」から構成されている。

本書の第一章から第五章までは、「政治の本質」と政治現象の起源に関する方法論上の諸問題が論ぜられている。本書のこの部分は、すでに『序説』において展開されたものであるが、『序説』よりの発展として、マルクシズムの成果をぐっと吸収されているのが特色であるだろう。第六章から第八章までは、近代国家における政治権力の構造までの、古代、封建権力の歴史的構造を展開されたもので、この部分が、『序説』よりも一歩前進した新しい展開である。しかし近代資本制権力の展開を見なかったことはまことに残念である。

そこで、私は、第一章から第五章までの「政治起源論」に関する教授の所説の紹介と批評、第六章から第八章までの部分では、とくに第八章の封建制政治権力の構造に関する教授の所説を紹介して見ようと思う。

本書において展開された教授の、政治学の原理的体系化とその歴史的検証は、これまでの教授の学問的労作よりも新しい発展をとげておられる。それは、マルクシズムの成果を教授の学説にとり入れられているということである。もちろん、教授のマルクシズムへの態度は、あくまで、教授の独特の政治学原理を補強される限りにおいてである。その点マルクシズムの立場からは、マルクシズムの主体的な論理を客観化し、ゆがめて解釈するという批判が生れるかも知れない。しかし、本書において教授がマルクシズムを吸収されるに際して、マルクシズムで未開拓とされた、マルクスやエンゲルスの初期の論文(例えば、『ドイツ・イデオロギー』、『資本制生産に先行する歴史的諸形態』)に新しい分析的なメスを加えられたという成果も素直に認めねばならないであろう。マルクシズムの吸収の上に立っての、教授の政治概念の構成は次のような円熟した表現をとってのべられている。

「政治の概念は、上述するように、『労働の分化』と『市場性』の見地から基礎づけられるであろう。まず

労働の分化が、社会階級を成立せしめる社会的根源であることは、すでにマルクスも認めた。労働の分化が社会階級にまで成長するためには、もとよりなお財産制度や社会制度の歴史的構造が関係する。それを通じて、法や政治権力が、社会階級に関係してくることは多くのべる必要はない。

次に市場性について見ると、それは経済圏の対立を作りだす根拠となった。したがって古来の政治権力は、市場性を単位として、地域的に基礎づけられてきた。もとより市場性が経済圏として存在する場合には、それはいまだ明確な地域的領域を作りだしてはいない。その経済交易圏の境界線は、極めて浮動的であり、相対的である。しかしこの経済的市場性が、特定の法的秩序のもとにおかれ、その法的関係を維持する政治権力の支配権とせられることによって、この市場性は、はじめに厳密な領域を与えられることとなり、ここから領土の概念が確立され、同時にその政治権力に向って法的に統合せられる国民の概念が成立することとなった。そうしてこの市場をめぐる社会制度は、政治権力によって支えられる統治組織としての、法秩序に発展することとなる。それとともに、家族制度

も、身分関係も、また財産制度も、すべてその統制下におかれることになるのである。

かように政治と政治権力は、一方では労働の分化、また他方では、市場の統一によって基礎づけられることが明らかであるが、政治権力や法は、生産関係そのものように、生産力に相応して絶えず改善され、発展する性質をもっていない。政治権力が社会階級性を反映する限り、政治権力は階級性の維持に役立つものとなり、法もまた同じ目的に奉仕するとすれば、政治権力には本質的に保守的性質があり、既存社会制度の保存に役立つとする。政治権力のこの保守性から生ずる社会的停滞、換言すれば、生産力の発展にしないで相応しなくなる、既存の生産関係を維持する力となってしまうた社会制度の固形化、或はそのために深化してゆく階級的矛盾の抑圧、そのための政治権力の強化と階級闘争の発展などが、政治の上に反映してくるのである。(二五〇二六頁)

「民族意識の成立は、いうまでもなく、市場を中心とする領域共同体の社会的存在性を反映する意識である。(二七頁)」

「したがって民族と階級の上に成立している政治権力

をめぐる政治現象の形態は、各民族と階級構造の歴史的形態によって規定され、民族的に歴史的に特定の形態をもつこととなる。…そして政治は、常に対外的には民族と民族との矛盾の意識において、また対内的には階級と階級との矛盾の意識において発展し、存続することとなる。政治はかような意味での社会的矛盾の意識である。したがって政治は、常に社会勢力の対立を反映する党派陣営理論として表現せられるところの、イデオロギーの党派的对立そのものであるということができよう。(二九頁)

「したがって政治は、経済を下部構造とし、それを反映する上部構造としてのイデオロギーの分裂である。対外的には民族意識として、対内的には階級意識として、党派的に構成される政治イデオロギーの抗争が、すなわち政治現象の本質的内容であるというべきであろう。(三〇頁)」

以上のような政治本質論が教授の到達された政治原理の構造である。このような政治の原理的構造がいかなる歴史的段階において形成されてきたかが、教授の「政治起源論」となる。第二章から第五章までの展開は、その「政治起源論」を展開するにあたって、「史的唯物論」

の方法の検証を通じて行われている。この場合、教授は、とくにエンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』（以下『起源』と称す）の一八八四年の序文の立場を支持され、スターリンの『史的唯物論』を批判されるという形式をとって論理がすめられている。

教授は、政治の原理的発生の時期を、原始氏族共同体の崩壊と階級社会への移行の時期すなわち族父制的氏族共同体の崩壊の時期としてとらえられている。その時期は、血縁的種族共同体から地縁的種族共同体への移行の時期である。（六八頁）この点は「史的唯物論」の見解と一致している。ところが、族父制的氏族共同体を転期として、その段階までの原始氏族共同体の形成と発展を支配した法則とその段階ごの階級社会の形成と発展を支配した法則とは異るといふ独自の見解を提起されている。「団婚制はいまだ血族婚姻禁忌の端初的規定であって、なお不完全なものであったから、それを完成するために種族の母系氏族制度は、しだいに血族婚姻禁忌への徹底化の線をたどって変化していった。それが原始共同体の支配的な基本的社会法則であった。かくして血族婚姻禁忌が完成された。それが一夫多妻制である。それはもはや母系系譜でなしに、族父的系譜をもつ氏族制度で

あった。」（六八頁）「一夫多妻的族父制度は、それだけですでに統一的社会単位となりうるものであって、必ずしも氏族組織を必要としないものであるけれども、族父制も血族婚姻の禁忌の社会法則の産物であるかぎり、ここに新しい社会法則が生じない限り、暫く氏族制度は存続しなければならぬ。しからば氏族制度を破壊する社会法則は何か。それは生産力の欠乏を解決するために現われた『分業』という生産方法の社会法則であった。」

（六九頁）教授によれば、原始氏族制度の発展の法則は、人間の種の生産を支配する自然法則すなわち血族婚姻の禁忌であり、族父制社会以後の発展の法則は、社会的分業を基礎とした生産方法に規制された、生産力と生産関係の矛盾（Ⅱ生産力の欠乏）という社会法則である。ここには歴史的に境界線が引かれねばならない。そして、このような見解を、エンゲルスが『起源』の序文において明らかにしたとされている。問題のエンゲルスの見解とはこうである。

「唯物的見解によれば、歴史における最後の決定的要因は、直接的なる生活の生産および再生産である。しかし、これはそれ自体また二種類である。一方では生産手段の生産すなわち食糧、衣料、住宅の生産、およ

びそれに必要な工具の生産であり、他方では、人類の増殖としての、人類の生産である。」

「そのもとにおいては、一定の歴史的時期や、一定の土地の人類が、生活するための社会制度は、二種の生産様式、すなわち、一方では労働の発展段階、そして他方では家族の発展段階によって規定せられるであろう。」(傍点―今中)

教授は、このエンゲルスの命題を自説と結びつけられ原始社会では生産が未だ発展していないから生産力も原始的であり、そこでの人類発展の決定的原因を人間そのものの生産であり、そのごの人間生産方式の発展が初めて「労働」(生産手段の生産)の生産方式を進展させ、しだいに経済関係に発展してゆくことを主張される。そして、スターリンの「史的唯物論」は、原始社会の発展の決定的要因を、「家族」すなわち人間そのものの生産に求めないで、生産手段の生産、「労働」にもとめていると批判された。すなわちスターリンが、歴史的発展の原動力を、生産力と生産関係の矛盾にもとめているが、未開の社会段階としての原始母系制社会では、このような矛盾は存在するだろうか(四〇頁)と問題を提出され、否定的な見解に立っておられる。

教授は、原始氏族社会発展の決定的要因は、人間そのものの生産としての自然法則として把握されることによつて、スターリンの「史的唯物論」をエンゲルスを典拠として批判された。そして更に、族父制的社会以後の社会発展に関するスターリンの「史的唯物論」の命題を批判されている。すなわちスターリンによれば、「歴史過程を推進する源泉が、生産力と生産関係の矛盾であることが史的唯物論の基本観念であり、そしてかような矛盾の深刻化を推進する原動力が生産力の発展であるとせられる。しかし更に問題になるのは、何が生産力を発展せしめるかということであるが、史的唯物論は、それにたいする適切な説明を与えていない。ただそれは生産用具の発展とされ、しかも生産用具はそれ自体の本質として、絶えず発展せざるを得ない本質をもっているとされるにすぎない。生産力はなぜ発展するかが問題である。」と。(五一頁)教授はそれに答えて、それは「生産力の欠乏である。」と。生産力の欠乏は、歴史的階級社会において認められることである。なぜなら「いやしくも階級社会であるかぎり、社会階級の対立は、時とともに深化するであろう。その深化は、生産力の階級的独占として起る」(六一頁)からである。いいかえれば、社会的生

産力が高まって、その作りだした富は、階級的に独占されるからであり、そこに「生産力の欠乏」が社会的欲求としてあらわれるからである。エンゲルスも「生産力の相対的未発達」が階級社会を作りだすことを『反デューリング論』において論じている。そのエンゲルスの「相対的未発達」を教授は、「生産力の欠乏」という概念でおきかえておられる。したがって、階級なき原始社会に、生産力の欠乏が生れることはない。生産力と生産関係の矛盾は存在しない。スターリンの「史的唯物論」は、社会発展の原動力を人間関係の問題として提起せずに、物質的な「生産力論」にすりかえたのである。

たしかに教授の指摘する通り、スターリンの史的唯物論には、原始社会における人間、そのものの生産の歴史的動因性の説明には欠けている。しかし、教授の説明に二つの疑問を感じざるをえない。その第一は、原始氏族社会の発展から、階級社会への移行に際し、その歴史的発展の決定的要因を、前者を自然法則とし、後者を社会法則として理解することが、エンゲルスの『起源』の立場であるかどうかである。教授の学説は、それとして、エンゲルスの議論を、教授の理論のごとくに解しうるかどうかということである。第二は、史的唯物論の命題であ

るところの「生産力と生産関係の矛盾が、歴史発展の要因であり、その矛盾の本質的規定性が生産力にある」という説明が、生産力の欠乏論を持ちださなければ、説明不十分であるのかということである。

第一の点に関しては、エンゲルスが歴史における決定的要因としてあげた二つの命題、生産手段の生産と人類の生産につづく節を素直に読めば、教授の見解と違った理解に到達する。念のため教授の引用をそのまま示そう。

「労働が未発達であり、その労働による生産物の量と、そしてまた社会的富が、制限されていなければならないほど、それだけ強く、血縁的紐帯によって、社会秩序は支配せられように見える。この社会秩序の下においては、血縁的紐帯によって確立されている、社会の文化組織の中に、おのづから労働の生産性が、しだいに発展してくる。それに伴うて、財産私有制と交易、富の差等、他人の労働力の利用価値、および、それと同時に、階級対立の基盤の発展が見られ、新しい状態に古い社会組織を適應せしめるための、数世代に亘る努力にも拘らず、結局両者の不一致から、変革の完成へと導くところの、新しい社会的要素が發展する。」(三三頁—三四頁)



労働が未発達な原始氏族社会（とくに母系制の段階）では、血縁的紐帯によって、社会秩序は支配せられるように見える。というのは、この段階では、人間それ自体が、生産力の重大な構成要素であったため、血族婚姻の禁忌を通じて強壯な人間を作り出す必要があったからである。そのため生産力の他の面、人間の「労働」の側面はかくれてみえる。しかし血族婚姻の禁忌は、人間それ自体の生産としての生産力の発展であったばかりでなく、それを通じて形成された氏族制度は、生産性の低い生産力（労働の面）を、単純なる協業を通じてカバーしてゆ�ための社会関係でもあったことを忘れるべきではないであろう。原始共同体における血縁的紐帯の発展は、あくまで、生産性の低い生産力に対応した生産関係として発展したものである。だからエンゲルスは、「血縁的紐帯によって、社会秩序が支配しているように見える」といっているのである。その後には、実に、血縁的な社会秩序の発展は、共同労働（協業）を基礎とした共同体、所有への発展、いいかえれば集団的土地所有への発展としてとらえることをいわんとしているのではなからうか。だから、そのあとに「血縁的紐帯によって確立されている、社会の文化組織のなかに、おのずから労働の

生産性がしだいに発展してくる。」それが階級対立の基盤となつて血縁的社会を崩壊するといっているのである。つまり、単純なる協業にもとづく社会的生産が、生産の低位性に対応するとともに、それが労働の生産性を高めてゆくことになるということである。それゆゑ、原始社会においても、生産力の未発達が、生産関係としての血縁的關係（所有の形態でもある）の発展の本質的契機であり、生産関係が反作用して生産力（強力な人間の生産および生産手段の生産）を発展させるという関係に立っているのではないだろうか。このようにエンゲルスの立場を理解するとき、原始社会における発展の法則もまた社会法則として史的唯物論の命題で理解することができるのではないかと考える。（拙著『政治学概説』三二頁―三五頁参照）

第二の問題についても、同じことが言える。たしかにスターリンの「史的唯物論」においては、生産力発展の要因の説明が欠けている。しかし教授も指摘されているように、エンゲルスは『反デューリング論』において、「生産力の相対的未発達」が階級社会を生みだしたことを指摘している。階級社会は「分業」という生産方法を通じて、生産力をそれ以前の社会よりも発展させた。し

かし、それと同時に、分業にもとづく社会の階級的対立が、また「生産力の相対的未発達」を生みだしたこともエンゲルスの指摘する通りである。史的唯物論によれば階級対立は、すなわち生産力と生産関係の矛盾の現象形態であるから、その矛盾は「生産力の相対的未発達」に基因するといわねばならない。したがって、階級対立がたえざる生産力の発展の契機であるということができるのである。それゆえ、生産力と生産関係の矛盾（階級対立）が歴史発展の原動力であるという命題は、「生産力の相対的未発達」が歴史発展の原動力であるという命題を意味しているのである。したがって史的唯物論の命題は、教授の「生産力の欠乏論」を必ずしも必要としないと考える。

いま一つ疑問として提出しておきたい問題は、原始氏族共同体の発展のなかで、母系制氏族から族父制氏族への転化の要因は何であったかということである。教授のいわれる「血族婚姻の禁忌」という社会的動因でのみ説明することが可能であるだろうか。この点に関して、エンゲルスが『起源』において、説明した「動産（生産手段）の所有理論」をいかに論評されるかを問いたいと思う。「拙著『政治学概説』（二九頁―三〇頁参照）」

## 三

教授の政治学の原理的構成における特色は民族論に見出すことができる。したがって本書においても、政治の原理的発生の条件としての民族の構造とそれが発生した歴史的阶段についての詳細な議論が展開されている。民族の構造を定義するに際して、マルクスやエンゲルスの初期の論文についての独自の考証を展開しながら、マルクス主義の民族論の発展的な展開として次のように民族を定義されている。教授によれば「民族は、市場共同体が法や権力を作りだし、最高にして、自主的な包容的なものとしてあらわれてきた場合の、生産関係の総合統一的な存在を反映する、社会的共同意識にはかならない。したがって、民族は、直ちに、法意識や政治権力と直接に結びつくところの、階級意識を内包する政治意識として、生成されるのである。」（一九頁―二〇頁）このような市場共同体を基礎とする民族は、数種の種族（血族的氏族共同体によって構成された）の統合された形態である。この種族から民族を創造した原因は、生産力の発展である。それは、社会的分業にもとづく交易経済である。この交易経済を社会単位として形成した市場

圈が民族の基礎である。この労働の分化が、対内的には階級対立を作りだし、対外的には、異種族の交流による民族の形成であった。だからこの二つの現象は、同一の原因すなわち分業によって発展したのである。(一一九頁)

教授のこの議論において、民族と階級は、ともに、生産力の発展にともなう社会的分業をその基本的原因として発生したものであるという意味で、その経済的規定性を承認するとして、さらに、階級と民族という二つの社会的意識において、いづれが、より基本的なモメントであるかという議論が更に必要であるのではないかと思う。なぜなら民族論の構成に際して、民族の消滅論との関連なしにその発生論を構成することができないからである。民族の消滅は、階級の世界的消滅を前提にしているからである。このような方法的な見地から、政治の起源を考えるとき、私は、階級が民族を創造していったということ、かってエンゲルスの『起源』を基礎にしながら展開した。すなわち社会的分業にともなう生産力の発展は、原始共同体内の部族相互間の経済的浸透、融合の過程であると同時に、その内部で形成された職能(貴族、農民、手工業者、奴隷)の階級的な対立を生み

だした。この部族連合(種族)内部における対立は、支配階級としての氏族制の上に立つ貴族をして、旧来の小さな社会の枠を越えて、劃期的な階級的同盟を結成させ、他の同一職能的な被抑圧階級(農民、手工業者)を抑えるために、旧来の公共機関(例えばテセウスの定めたとされるような公共機関)を、抑圧の機関、すなわち国家に転化させるのである。部族連合内に発展した経済関係の発展が、氏族血縁関係を崩壊させてゆく程は、次第に形成された諸階級の対立、斗争の形態であらわれた。その階級対立の矛盾は、政治権力を媒介として、部族相互間の階級的同盟を結成させてゆく過程でもあった。この場合、政治権力の成立が、国家的、政治的イデオロギーの共通性を作りだすのに、能動的な役割を果たす。このような階級斗争が、氏族的な貴族の支配を打ち倒したとき(例えばアテネにおけるクレイステネスの革命八紀元前五〇五年V)血縁的紐帯は地縁的結合(市場共同体)にとつてかわられ、「性格共同体」としての民族を形成する。だから、階級の成立あるいは対立が、小規模の部落や地域を超えて、広汎な人間を、大きな集団につくり上げてゆくのであり、したがって、階級的な矛盾が、外延的な拡がりをもった民族を形成していったといえるの

ではないかと考える。(拙著『政治学概説』八八一—五〇頁参照。『歴史における民族の問題』歴研一九五一年年報、古代史の部)

このように考えてゆくと、教授が、古代奴隸制を二つの段階に分けて、「氏族的奴隸制」と「貴族的古代奴隸制」とせられている見解について疑問が生ずる。教授は、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』や『諸形態』を基礎としてそれらでの処論を整理された上で、「族父的氏族制度」の段階を、階級社会Ⅱ民族社会と考え、それを古代の第一段階として「氏族的奴隸制」の段階であると考えておられる。さらにそれをマルクスという「アジア的形態」の段階と考えられている。したがって、マルクスのいう「古典的古代」においても、「アジア的形態」に相応する「族父制氏族共同体」の第一段階から、「都市共同体」の第二段階(貴族的奴隸制)に移行したという議論に発展する。(八五頁—九二頁)

ここで詳細に議論を展開することはできないが、マルクスが、『ドイツ・イデオロギー』や『諸形態』で展開しているのは、「族父的氏族共同体」の段階を「アジア的形態」の段階と考えていたのではない。「族父的氏族共同体」は、原始氏族社会の最後の形態として考えられていたのであって、その崩壊過程の歴史的な形態とし

て、「アジア的形態」「古代古典的形態」「ゲルマン的形態」を類型化したのである。したがって、マルクスにおいては、「アジア的形態」は、族父的氏族共同体の崩壊のアジア的形態ということで、決して族父的氏族共同体の段階でない。マルクスにあっては、族父的氏族共同体の段階は、血縁的紐帯が崩壊しつつある段階であって、いまだ地縁的共同体の段階としては把握されていない。それゆえ、この段階を、教授のいうように、民族社会Ⅱ階級社会と定義することはできない。マルクシズムにおいては、古代社会は、族父制氏族共同体の崩壊後の段階からはじまるのであって、古代社会の研究は、その歴史的形態として、「アジア的形態」「古代古典的形態」の類型化の特色を、一段階としてすすめられているのである。したがって、民族もまた「アジア的形態」「古代古典的形態」「ゲルマン的形態」などの階級社会の特性のなかで形成されたと見るべきであろう。

#### 四

第六章では、古代権力としてのアジア的デスポチズムの概念をより精密なものにするために、マルクスの『諸形態』を基礎として理論が展開されている。つづく第七

章は、古代政治権力の崩壊と封建制の成立についての理論が広汎な教授の研究の基礎の上に、展開されている。しかし、私の現在の能力では、十分にこれら二つの章を理解し、論評することができない。紙数もつきてきたので、最後に、第八章の封建制政治権力の構造論の方法論的な紹介をもって、本書の書評を終りたい。

教授は、封建制政治権力の構造を明らかにするためにも、マルクシズムの方法を採用されている。すなわち封建制政治権力の構造を規定するものとして、マルクスによって分析された経済的土台を前提にして政治権力の構造を明らかにしようとされておられる。その際、マルクシズムにおいて、封建制の本質規定が必ずしも統一的な規定となっていないことに着目され、封建制の本質に関するマルクシズム内での議論を整理される努力をされた。そこでまずその議論の整理の手がかりとして最近のソヴェト歴史学界における封建制に関する論争を紹介される。そして、その論争を正しく発展的に継承してゆくために、マルクスの封建制にたいする古典的な解釈に立ちかえり、封建制の規定の方法を明らかにしようとす。その場合の問題点は、スターリンとマルクスの封建制に関する規定の統一的な理解にあるとされる。スター

リンが「封建制の基礎は封建的土地所有である」とのべたことと、マルクスが『資本論』において、「地代は土地所有を実現する」そして「地代は特定人の特定の地表面に対する所有である」といったこととの対照的な理解である。(二三八頁) そこから教授は「封建制を規定するために必要なことは、封建制を規定する『特定の土地所有』とはどのような『土地所有』か、そしてそのような土地所有を実現する『地代』はどのような『特定の地代』か、ということではなくてはならない」(二三九頁)と問題を立てられた。その説明として、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』や『諸形態』を理解しながら、封建制の歴史的な段階は、「土地所有の公領制から私領制への移行」(二四〇頁)の段階であるとされる。そして「封建制の基本的な経済法則は、地代一般でなしに、土地私有制を支配する」段階における「地代法則であるということができる」。(二四〇頁) 教授は、封建制を土地所有と地代の関係において理解する場合に、封建的土地所有を規定する地代の歴史的段階性を明らかにすることに解釈の鍵を見出されようとされているのである。

このように教授は、マルクス主義封建制論の整理の上にも、封建制政治権力を明らかにしようとされて次のよう

にいられておられる。「マルクスはわれわれの課題に対して、僅かに経済的土台の分析を示してくれたのにとどまった。ここからわれわれの研究は発足しなければならぬ。」(二五〇頁)そして最後に「封建制の法的・権力的規定」に関する試論的素描を結論とされて、A5版・二五六頁の大著は終わっている。

## 五.

本書の書評を終えたとき『中央公論』三月号の田中美知太郎氏の『政治論の問題点』という評論を読んだ。氏は現代政治論における政治学者の議論を読んでみても、一向に「政治とは何であり、政治的とはなんであるか」を知ることができないと現代政治学者の盲点をついている。つまり現代政治学が、政治現象の現象論的な把握に終始し、「科学としての政治学」にたいする学問的追及に欠けていることの指摘であるということができよう。この点、「政治の本質」を絶えず求めながら「科学としての政治学」樹立のために、努力されてきている教授の学問的態度こそ今日、高く評価されねばならないのではないかと私は考えている。こんごとも、教授のこの態度を学びながら「科学としての政治学」の樹立に献

身したいと思っている。そのために本書は多くのものを私に教えてくれた。

最後に、教授の「政治権力の歴史的構造」の完成を願うとともに、教授の『政治学原論』の完成の一日も早くらんことを願っている。